神道フォーラム

ISSA : International Shinto Studies Association

Vol.54
神道国際学会会報
平成29年1月1日号

特定非営利活動法人 神道国際学会　〒158-0096 東京都世田谷区玉川台2-1-15 ベスト用賀2F　電話：03-6805-7729　http://www.shinto.org

新年のご挨拶

マイケル・パイ
（神道国際学会会長）

平成29年を迎え、神道国際学会（International Shinto Studies Association, ISSA）は新しい段階へと入ろうとしております。数名の理事の入替えがあり、私自身も長年の理事経験を経て、今期は会長を拝命することとなりました。この名誉の喜びとともに、責任の重さを感じている次第でございます。理事長には、三宅善信先生が再任されましたので、会として変化とともに継続性も保つことができます。

私からは、まずこの場をお借りして前会長である栗本慎一郎先生に感謝の意を表したいと存じます。栗本先生は平成25年から会長を務められ、ご体調の困難に打ち勝ちながら、宗教また社会の諸問題について独立性を保ちつつ、声をあげていくことの重要性を説かれ、私たちの会にプロフェッショナルな助言と学術的なご意見を与え続けてくださいました。また岩澤知子麗澤大学教授の貢献にも感謝いたします。同教授はこの数年間、ＩＳＳＡにおいて中心的役割を果たしてくださいました。その功績なくして現在の本会の存続はありえなかったでしょう。そして、京都の国際日本文化研究センターのジョン・ブリーン教授は本会副会長としてだけではなく、『神道フォーラム』の編集長としても活躍してくださいました。彼らが今後も本会に影響を与え続けてくださることを願って止みません。

ＩＳＳＡの新体制や新理事については紙面の中でご紹介してまいりますが、私は会長として、ＩＳＳＡが平成29年というこの年を自信とやる気にみなぎってスタートできたと感じております。神道研究を高めていくための環境整備にベストを尽くす準備ができあがっております。ハイレベルな学術的研究と、社会的責任を負える創造的かつ一般向けの活動を融合していく途を模索しておりますが、学術的な知識の交流やフィールドワーク・見学会など、現実生活における神道研究を通してこれを実現していこうとしております。

また、海外に目を向けますと、神道という日本独自の宗教に対する世界からの関心が非常に高まっております。この関心の高まりに応えるべく、この魅力ある伝統、つまり神道についての信頼に足る知識の結集のために力を尽くしてまいります。どうか、皆さまにおかれましても、どのような形でも結構ですので、私たちのこの価値ある活動にかかわりを持ち、サポートをしていただけますようお願い申し上げます。

平成29年元旦

新体制紹介

三宅善信
（神道国際学会理事長）

神道国際学会会員の皆様におかれましては、それぞれに清々しい新年を迎えられたことと拝察申し上げます。年頭に当たり、一言ご挨拶申し上げます。

四年前に運営上の最高責任者になって以来、私は、それまでの「専任のベテラン事務局長がすべてお膳立てをした料理を理事は食べるだけ」つまり、理事は、年に二・三回の理事会の席で思いつきの意見を述べ、シンポジウムやセミナーで自分の研究を発表するだけという学会のあり方から、「理事にはできるだけ実際の学会の運営に関わってもらう」という方針に転換し、実際、そのように運営してまいりました。

その中で、この度、任期満了にて理事の役職をご退任された栗本慎一郎先生にはご体調の不十分な中を会長としての重責を、ジョン・ブリーン先生には『神道フォーラム』の編集長を、岩澤知子先生には事務局業務のスーパーバイズをご分掌いただき、十数年間続いてきた旧体制から新体制へと移行する重要な時期に、運営の労を執っていただきましたことをまずもって御礼申し上げます。

今年度からの新体制においては、国際宗教学宗教史学会の重鎮マイケル・パイ先生に会長の重責を担っていただき、副会長職は当面の間空席とし、常任理事にはカトリックのムケンゲシャイ・マタタ先生に加えて、事務局の近所にお住まいの神習教教主の芳村正徳先生にお就きいただくことになりました。

理事として、オスロ大学とカリフォルニア大学でそれぞれ教鞭を執られているマーク・テーウェン教授とファビオ・ランベッリ教授にご留任いただき、ヨーロッパとアメリカの学会で、会長を扶けていっそう本会の名声を高めていただきたいと思っております。また、国内で活躍されているアレキサンダー・ベネット教授とオ・ソンファ（呉善花）教授には、日本人の行動を深い部分で規定している神道的なものの考え方について、社会に認知させる活動をしていただきたいと思います。

さらに、今期から、鈴木岩弓先生と塩谷崇之先生が理事に加わっていただきました。鈴木先生は、本学会の理事では山折哲雄先生以来の東北大学出身の宗教民俗学者で、「神」「仏」「先祖」「霊」「あの世」といった不可視な存在で取りもたれる関係から構成される「宗教」というものを研究されてこられました。また、塩谷先生は、東大法学部を卒業後、東京で弁護士として活躍される傍ら、埼玉県の秩父今宮神社の宮司として地方における宗教的伝統の継承に尽力されています。この二人の新理事の加入で、本学会の理事の顔ぶれもいっそう厚みが増すと思います。

また、引き続き監事を務めてくださる椎名潤先生も、監事としての本学会の会計業務の総覧だけでなく、新聞記者として長年培った編集・執筆経験を活かされ、『神道フォーラム』へフィールドワークのレポート等の労も執ってくださっていることに感謝の意を表したいと思います。

最後に、理事長として今年度の活動方針についてご紹介したいと思います。諸般の事情で、過去二年間にわたって一般会員の皆様が楽しみにしておられた公開シンポジウムやセミナーが開催できなかったことをお詫びを申し上げます。今年は3月2日と11月11日に、それぞれ魅力的な公開イベントを開催する予定で現在、準備作業を進めておりますので、詳細が固まり次第、あらためて会員の皆様にご案内を差し上げますので、ふるってご参加くださいませ。

本会の運営は、会員の皆様方からの物心両面のご支援によって維持されております。新しい年も、倍旧のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成29年元日

新役員ご紹介

塩谷崇之（しおのや・たかゆき）

初春の候、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

このたび当学会の理事にご選任いただきましたので、就任のご挨拶を申し上げたく存じます。

小生は、埼玉県秩父市に鎮座する今宮神社の社家に生まれ、東京大学法学部卒業後、國學院大學神職養成課程にて神職資格を取得。同神社職員を経て、平成23年4月からは今宮神社宮司として神明奉仕しております。この間、埼玉県神社庁の教化委員、神道青年会の理事などの要職も仰せつかり、神道教化活動にも取り組ませていただきました。

他方、平成7年に司法試験に合格。第一東京弁護士会に所属し、東京都中央区「真和総合法律事務所」にて訴訟案件や企業法務、法律相談等の業務に従事するとともに、第一東京弁護士会「法教育委員会」委員長、関東弁護士会連合会「法教育センター」委員長などを歴任し、会務を通じての公益活動にも携っております。さらにライフワークとして、NPO法人「社叢学会」理事、一般社団法人「まつりごと」代表理事等として環境問題や地域問題にも取り組んで参りました。

この間、平成神道研究会の活動等を通じて、当学会の三宅善信理事長と親交を深めさせていただいた御縁もあり、このたび理事へのご推挙いただき誠に光栄に存じます。

これまで専ら「実務」に携わってきた身であり、学問としての「神道学」の研究に取り組んできた経験はございませんが、諸先生方にご指導いただきながら、実務面から当学会を支えてゆければと考えております。

なにとぞよろしくお願い申し上げます。

鈴木岩弓（すずき・いわゆみ）

この度、新たに理事に加えて頂くこととなりました東北大学の鈴木岩弓です。「鈴木」は問題ないのですが、名前が読めない方が多く、「イワミ」「ガンキュウ」果ては「イワコ」と読み間違われる方までいらっしゃるのですが、「岩」も「弓」も小学校二年生で習う漢字そのままに、「イワユミ」と読みます。

実はこの名前、歌人であり民俗学者・国文学者であった釈迢空こと折口信夫が付けてくれたものです。折口が名付け親になったことは珍しくはなかったようですが、少々奇抜な名前を付けることで有名であったようで、私の母親は最終的にどのような名前となるかが不安でならなかったと言っておりました。この点、私自身は鈴木が良くある名字ですので、珍しい名前であったことで人に覚えてもらうことでき、気に入っています。ちなみに岩弓の由緒は、その昔、鈴木氏に巌弓臣（イワユミノオミ）がいたことから、そうした「臣」に肖るようにということであったようです。とはいえ表記を「巌」にすると画数が多く、子どもが書くのは大変、ということで「岩弓」に落ち着いたと言います。

1951年に東京で生まれ、大学・大学院と仙台で過ごした後に島根大学教員を11年務め、1993年から母校の東北大学宗教学研究室に戻ってきました。専門は宗教民俗学・死生学ですが、今年の3月末をもって社会的死とも言うべき定年を迎えます。昨年11月に参加した研究会は、大変刺激的でしたので、これからも楽しみです。よろしくお願いします。

神道国際学会役員（平成29年1月より）

役　職	名　前	所属団体・肩書き
会　長	マイケル・パイ	マールブルク大学名誉教授／元国際宗教学宗教史学会会長
理事長	三宅　善信	金光教泉尾教会総長／（株）レルネット代表取締役
常任理事	ムケンゲシャイ・マタタ	オリエンス宗教研究所元所長
常任理事	芳村　正徳	神道神習教教主
理　事	マーク・テーウェン	オスロ大学日本語学科教授
理　事	アレキサンダー・ベネット	関西大学国際学部教授
理　事	オ・ソンファ（呉　善花）	拓殖大学国際学部教授
理　事	ファビオ・ランベッリ	カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授
理　事	鈴木　岩弓	東北大学大学院教授
理　事	塩谷　崇之	真和総合法律事務所弁護士／秩父今宮神社宮司
監　事	椎名　潤	岐阜女子大学客員教授／元中外日報社取締役編集局長

神道国際学会理事による研究発表会開催

昨年十一月五日（土）、東京都中央区の会議場において、神道国際学会理事とゲストによる研究発表会が開催された。“Shinto Studies Today”というテーマの下、各発表者がそれぞれ日頃の研究成果を発表し合い、また、それに対して疑問やコメントをぶつけ合いながら、互いの専門分野を交差させて議論が高まった。発表者と発表テーマは次の通り。

◎マイケル・パイ理事：Pilgrimage in Shinto. Reorientations
◎岩澤知子常任理事：諏訪御柱祭・再考
◎ファビオ・ランベッリ理事：海洋の神学：海からみた神道史
◎鈴木岩弓東北大学大学院教授：〝死者の記憶〟のメカニズム

発表会は東京都中央区八重洲の貸し会議場において行われ、発表者とコメンテーターのみによる専門性の高い学術的な意見交換の場となった。はじめに三宅善信理事長によって開会の挨拶が述べられ、マイケル・パイ理事から発表が始められた。パイ理事は戦前に発行された神社巡りのパンフレットなど多くの資料を示しながら、菅公聖蹟二十五拝や伊勢一二五社巡拝に代表される日本各地の巡拝について英語で語り、神道における「お巡り」の背景にある仏教的な影響や国家により神社巡りが利用された歴史を紐解いて見せた。そもそも巡礼とはお参りとは違い、居住地から離れた場所へ赴くことであると指摘し、その中で学業成就や縁結びなどの利益を求めるのか、霊的な精神性を目的として巡礼するのかといった巡礼の定義から解説をしていった。参加者からは英語で質問が相次ぎ、パイ理事もそのひとつひとつに丁寧に答えていった。

続いて岩澤知子常任理事が諏訪大社御柱祭について、自らの体験をもとに、この祭の根源的な意味について示唆に富んだ発表を行った。岩澤理事は六年前より、かの地に居を構え、氏子連に加わり、その一員として神聖なる御柱を山から里へ、そして社へと実際に曳いて、この祭の意味を探究している。岩澤理事は豊富な写真や研究資料を提示しながら、古代に遡る諏訪の勢力関係の研究から、現代の御柱祭に繋がる政治と宗教の二重性、宗教行事としてのこの祭の中にある男根崇拝の要素について、祭の参加者ならではの視点から解き明かしていった。秩父今宮神社宮司で弁護士の塩谷崇之氏は岩澤理事と共通の興味を持って研究を進めており、両者の間で活発な意見交換がなされ、他のコメンテーターも興味深く聞き入った。

ファビオ・ランベッリ理事は、日本は島国でありながら山岳信仰研究は多数なされているものの、海に関する信仰・宗教についての研究が非常に少ないことに注目し、神学的な海の役割について熱心に語った。ランベッリ理事は中臣祓（なかとみのはらえ）、宝船、船霊（ふなだま）信仰という三つのテーマを設けて発表した。まず中臣祓を取りあげ、古来、穢れを浄化するという点において海は重要な役割を果たしていながら、そのメカニズムはほとんど研究・解説されていないことを指摘し、現在の研究の経過を報告した。続いて宝船が、本来は悪いものを乗せて海へ流していくというものであったことを述べ、ここでも海の役割として穢れを浄化するという側面があることを指摘しつつ、穢れの浄化という役割から宝をもたらすものへと変遷する過程を解説した。さらに船霊信仰が富みや豊穣を象徴する点に触れ、山岳信仰に代表される垂直軸を持つ宗教に対するヒエラルキー（階級）のない水平的な海の信仰について熱心に語った。質疑応答では山岳信仰―海洋信仰の対比だけでなく、神道や日本の枠にとどまらず、仏教やインドの思想にまで議論が拡大した。

最後に東北大学大学院の鈴木岩弓教授が「〝死者の記憶〟のメカニズム」と題して、死者がどのように悼まれ、残された人々の記憶の中でどう変化していくのかについて、グリーフケアという視点から述べた。主に二〇一一年の東日本大震災とその後の津波による被災者やその遺族を取り上げながら、死の直後に死者を固有名詞で語る段階から、時を経て弔い上げていく中で変遷していく死者に対する人々の想いについて、イエと地域社会の役割に注目しつつ、明快な口調で語った。参加者からは親族・家族を亡くした実体験をもとにする質問や意見が活発に述べられ、終了時間を過ぎてもその議論は収まるところを知らなかった。

最後にアレキサンダー・ベネット理事より、この研究発表会は非常に実りが大きかったこと、そして各氏の今後の研究に大いに役立つであろうことが述べられ、神道国際学会の今後ますますの発展を期待する言葉をもって閉会の挨拶とされた。神道国際学会では、今後もこのような専門家同士が意見をぶつけ合う機会を提供し、神道を中心とする日本文化研究を盛り上げていく。なお、発表の内容については後日、神道国際学会より論文集として発行予定である。

第三回フィールドワーク
大阪・鵲森宮／玉造稲荷神社／三光神社

椎名 潤（岐阜女子大学客員教授・神道国際学会監事）

平成二十七年十月から始まったフィールドワークの三回目として、昨年九月三日、これまでの京都を離れ、三宅善信理事長の地元・大阪で、物部・蘇我両氏の戦いにまつわる聖徳太子創建の鵲森宮、日本最古の条里制都市・難波宮跡、同じく日本最古の稲荷神社といわれる玉造稲荷神社、そして竹内宿禰ゆかりの三光神社などの歴史スポットを参詣・訪問した。

参加者は十人。ＪＲ大阪環状線「森ノ宮」駅に集合し、同駅まで出迎えてくれた石崎正明宮司の案内で、駅前に鎮座する鵲森宮（通称・森之宮神社）＝大阪市中央区森ノ宮中央＝に向かった。はじめに、隣接して建てられた八階建ての「森之宮ビル」内に通され、鵲森宮の謂れや変遷の歴史を伺った。

参加者全員で記念撮影（玉造稲荷神社本殿前）

もともと、この辺りからは、縄文期から近世にわたる複合遺跡・森之宮遺跡が発見されていることから、古代の上町台地（丘陵）東側に広がっていた河内湾が淡水化し、それがやがて潟・湖へと変化し、そこに土砂が堆積して、現在の平野（大坂）が形成されていったものと思われる。

そして六世紀に至り、推古天皇の御代、難波の吉士磐金という人物が聖徳太子の命により、新羅へ使者として渡った帰路、この堆積地の森（難波森と呼ばれていた）に持ち帰った二羽のカササギ（朝鮮カラス）を放ったことから、当地を鵲森と呼ぶようになったという。

鵲森宮は五八九年、聖徳太子が物部守屋との戦いに必勝を祈願し、勝利したことから、父である用明天皇を神として祀るために創建されたもので、今年で一四二八年目を迎える。主祭神は用明天皇、聖徳太子の生母で蘇我稲目の娘である穴穂部間人皇女、それに聖徳太子。当時の境内地は方八町もあり、神領は千石。古地図や古文献にも多く記された由緒ある古社で、壮麗さを誇っていた。

聖徳太子といえば、仏教興隆に尽力し、また蘇我氏の系統に連なることから、篤い仏教信仰者として知られるが、石崎宮司はズバリ、「政治的な立ち位置とは違い、聖徳太子ご自身は神道人です」と断言された。現在の本殿は昭和七年に造営されたもので、先の大戦中の空襲をかろうじて免れている。

石崎宮司は古神道や大和言葉に造詣が深く、「本来なら神社は〝かみのもり〟とか〝かみやしろ〟、また伊勢神宮は〝いせのかみみや〟と言うべきで、ひもろぎが神籬とか胙（げつ・さく）となったら、どうなるのか。〝ひも・あもり〟の約だと知ることもできない」と嘆いておられた。

次は、鵲森宮を西に十分ほど行ったところにある幻の古代宮殿「難波宮」跡＝大阪市中央区法円坂＝へ。ここでは大阪文化財研究所の南秀雄所長から説明を受ける。

南所長の話では、難波宮造営以前の五世紀後半、この地には倭王権に係わる施設（倉庫群など）の遺構（法円坂遺跡）があったという。また難波宮も前期と後期に分かれ、前期難波宮は大化の改新（六四五年）の翌年、即位した孝徳天皇が新政権の舞台として、飛鳥から遷都。遺構からは内裏、朝堂院、八画殿院、朱雀門などが見つかっている。しかし、威容を誇った宮殿は六八六年、大蔵省からの出火で焼失した。

難波宮跡（内裏）で説明を受ける参加者

その後、奈良時代になって、聖武天皇が七四四年、難波宮を皇都とする詔を発し、本格的な復興に着手する。後期難波宮は平城京（政治）に対する「副都」（外交と経済）として、地政学的な役割を担っており、こうした関係は中国の長安と洛陽、豊臣秀吉の伏見城と大坂城にも見られる。

さらに朱雀門跡を東に折れ、大坂カトリック大聖堂前を通って、玉造稲荷神社＝大阪市中央区玉造＝へ向かう。当地には六千年前から人々が住み着いたが、稲作が始まった弥生期、その収穫に感謝するための社が必要になり、垂仁天皇十八年（紀元前十二年）に同神社が創建された。主祭神は宇迦之御魂大神。古墳時代には『日本書紀』に記された玉作部（玉造部）の居住地にもなり、やがて韓半島（曲玉・勾玉文化）や中国大陸との文化交流の要地であった。地名の玉造はこの伝承に基づくものである。

近世に至っては、豊臣家が大坂城の鎮守神として祀り、その後、徳川の世になっても、定紋の提灯を奉納するなど、篤い信仰は引き継がれ、江戸時代に隆盛を極める伊勢参り（おかげまいり）では、同神社が大坂の起点になるなど、大いに栄えた。

鈴木一男宮司の案内で、勾玉作りの行程や古代の土器、各種玉類などを展示している「資料館」を見学。境内には豊臣秀頼の銅像（日本芸術院会員の中村晋也氏制作）や秀頼が慶長八年（一六〇三年）に奉納した鳥居、伊勢参宮本街道起点碑（伊勢まで一七〇㎞）などがある。特に鳥居は建立以来四〇〇年、大坂城鎮守神のシンボルとして、大坂夏の陣・先の大戦と、二度の戦火をくぐり抜けてきたが、平成七年の阪神大震災で損傷。歴史的使命を終えたようだが、のちの再建を期して、そのままの形で保存しているという。

三光神社には大坂城に通じていたという「抜け穴」が……

そして最後がＪＲ大坂環状線「玉造」駅に近い三光神社＝大阪市天王寺区玉造町＝。鵲森宮、玉造稲荷神社と同様、大坂城東南の上町台地の真田山に鎮座し、その昔は姫山神社（大昔の「姫の松原」の遺称）とも呼ばれていた。創建は仁徳天皇の三代後の反正天皇の御代のことで、主祭神は天照大神。

社伝によると、創建以後、景行・成務・仲哀・応神・仁徳の五代（十二代から十六代）の各天皇に仕えたという伝説上の忠臣・武内宿禰の後裔・武川氏が代々、神職として奉仕してきたという。現在は小田礼五郎宮司。境内にある末社の竹内宿禰社は、富貴長寿の神として祀られ、大坂七福神巡りのうちの「寿老人」信仰のご利益を求める参詣者が絶えない。

また同神社には、大坂冬の陣の際に構築された真田丸（大坂城南側の防御拠点）に通じる「抜け穴」の痕跡が残っており、必見である。

今回の探訪は総計三時間三十分、一万二千歩の行程だった。

第３回フィールドワーク・大阪　感想文

イスラムと日本の宗教についての考察

（神道国際学会フィールドワークに参加して）

サミール･ヌーハ　同志社大学客員教授

昨年9月3日、神道国際学会の三宅善信理事長のお誘いで、私は大阪における神社の奥深い歴史を探るフィールドワークに参加した。三宅先生が参加者を案内し、訪問先の神社では多くの点について詳しい説明を加えてくれたので、鵲森宮、玉造稲荷神社、三光神社の歴史を学ぶ貴重な機会となった。これらの歴史上重要な神社を訪れて、私はこれまで日本人はこれらの神社にほとんど注意を払ってこなかったが、ＮＨＫの大河ドラマ（『真田丸』）が放送されただけで人々がこれらの神社を訪れるようになったということを知った。

神社の名前が変わり、時には神社の境内が縮小されたり失われたりして、鵲森宮では残された鳥居と小さな社殿が在りし日の神社の場所を示していることを学んだ。なんと神社の敷地内に高層のビルが建てられて、その中に宮司の事務所も構えられていることに驚きを感じたが、さらに興味を惹かれたことはそのビルの屋上にも社殿が建てられていたことで、三宅先生によると、東京でも多くのビルの屋上に社殿や祠があるとのことであった。このことは私に、エジプトや他のいくつかのイスラム教国では、税金や水道代・電気料金から逃れるために、ビルの１階やビル内部に「神の家」であるモスクが建てられていることを思い起こさせた。日本では一体何のために、ビルの屋上に神社があるのだろうか!?何が目的なのだ？

神道のルーツは日本の歴史に深く関わっていると知ることは重要である。玉造稲荷神社は、社伝によると、古代の勾玉の製造地であったこの地に鎮座したのは紀元前12年だそうだが、現在の神社の境内地は、豊臣氏によって大坂城の鎮守神として祀られたことに由来するという。

一方、三光神社は真田山近くの丘の上に「反正天皇の御世」すなわち、紀元５世紀に創立された。神社や神道のいくつかの教派では、伝統的に特定の家系が宮司職を世襲するイスラム教の「カリフ」のようなシステムがあり、三光神社の宮司は、武内宿禰の末裔の武川氏が歴代神職として奉職することになっており、実に84代の長きにわたって継続していたのであるが、その伝統も現在の宮司の二代前で途切れてしまった。

われわれが訪れたこれらの神社について、より詳しく学ぶためには『古事記』を読むことが重要となる。そして、土着宗教としての神道と渡来宗教としての仏教の間には、物部氏と蘇我氏の争いのように、時には合戦にまで発展するような紛争があったことを知ることも、日本の歴史を読み解くためには大切なのである。

中馬弘毅　大阪ユネスコ協会会長

私ども大阪ユネスコ協会の事務所は、昨年より現在の法円坂「大阪市教育会館」に移りました。此処はご承知のとおり、今から1360年ほど前の孝徳天皇「難波長柄豊崎宮」の宮跡です。その後、日本の政治の中心は飛鳥・奈良に移り、皇居も藤原京―平城京―平安京へと推移しますが、それ以前は主として大阪湾の東岸＝なにわの上町台地一帯でした。

当時は、ヒト・モノの輸送は舟運が主流で、瀬戸内を通じて九州・朝鮮・中国と、太平洋を通じて四国・東海と、淀川・琵琶湖を通じて北陸・日本海と連なり、交通の要衝として「なにわ津」＝上町台地の北端が大いに栄えて、経済的に文化的に政治的にも、わが国の中心的存在でありました。

しかし、当時の史跡・遺跡も、石山本願寺を信長が壊し、秀吉が大阪城を築くに及んでほとんど破壊され、生国魂神社や生摩神社などのように移転させられたりして、多くの人々の記憶から消失しています。

今や、なにわ大隅宮や高津宮の存在した場所も判りませんが、この「難波宮」の実在が明らかになったように、もう一度わがなにわの2000年の歴史を私たちは掘り起こし、古代日本の中心であった誇りにしたいと思います。

このたび、神道国際学会のフィールドワークに参加して、その想いを新たにした次第です。

月ヶ瀬 悠次郎　Atelier de Reve主宰

風土記の伝わる播磨国に生まれたものとして、伝承と歴史の境界線を辿る旅は興味深いものだ。

三宅善信先生のお誘いで参加したフィールドワークは、鵲森宮に始まり、難波旧跡、玉造稲荷神社を経て三光神社を訪れる旅だったが、それぞれにスペシャリスト（宮司や博物館長など）からご教授いただいた伝承や歴史は、播州と大和朝廷の関係についての私的研究にも重要なヒントとなった。

また、諸先生方が史跡や歴史を語る時の表情に、その土地に伝わる歴史や文化への愛を感じたものだ。この地域や歴史への愛こそ、私たちが後世に伝えてゆかねばならない文化の本質ではないだろうか。

連載　神道ＤＮＡ

『反知性主義とオモイカネ』

金光教泉尾教会 総長／(株)レルネット代表　**三宅善信**

英語の権威『Oxford Dictionaries』は2016年の「Word of the Year（今年の言葉）」として「post-truth」を選出した。これは、政治家が国民投票や選挙に際して、「まったくの事実無根の言説で有権者を騙しても構わない」という意味だそうである。私は前号（第53号）の本欄の末尾に、英国のEUからの離脱という事態を受けて、「100年後の未来において、『世界が決定的に悪くなったのは2016年のあの時であったな…』とマイナスの評価をされないためにも、今を生きるわれわれが真剣に考える必要がある」と書いて警鐘を鳴らした。しかし、残念ながら、事態はその方向へとドンドン進んでいるように思われる。

その後も、11月8日の米国大統領選挙におけるドナルド・トランプ氏の勝利や12月4日のマッテオ・レンツィ首相が主導したイタリアの憲法改正国民投票の否決など、これまで「成熟した民主主義国家」と思われていた国々において、ポピュリズムの熱狂が吹き荒れ、おそらく、有権者にとっても後に禍根を残す選択が行われ、結果的に、習近平やウラジーミル・プーチンといった「独裁者」を喜ばすこととなった。

この文脈を説明するためによく使われたる用語のひとつに「反知性主義（Anti-intellectualism）」という言葉がある。この反知性主義という言葉は、もともとアメリカ教会史における「大覚醒（リバイバル）」運動を説明するために創られた。英国国教会の弾圧を逃れて17世紀初頭に新大陸に進出した清教徒（ピューリタン）たちは、自らを「ファラオの圧政を逃れ、神の言葉を信じ、海を渡ってエジプトを脱出し、約束の地を得た新しいイスラエル」と認識していた。彼らは、アメリカ大陸東海岸のニューイングランドと呼ばれる地域で独自の祭政一致国家群を形成したが、これらの地域で民衆を指導したのは聖書学の専門的な知識を身につけたエリート聖職者たちであった。これらの聖職者を養成するためにハーバードやイェールといった大学が創立された。

その後、新大陸における爆発的な人口増加が起こると、エリートによる小難しい神学論に基づく高度な説教よりも、客観的な証拠や論理的な厳密性には乏しくとも、聴衆を「熱狂」させ、「自覚的な回心」を与える特定の伝道師が人気を博した。これを「リバイバル運動」と呼ぶ。彼らは、「神の真理を理解するために高度で専門的な知性は必要でなく、むしろ無教養な者にも理解できるものこそが真理である」と反論し、民衆の支持を得た。ここに、アメリカ人の基本的な性格のひとつである「反知性主義」が形成され、その後のアメリカ史を通じて、数十年に一度、このような大きな思想的「熱病」が社会を覆うようになった。

今回のアメリカ大統領選挙でも、大勢の人々が、「トランプ候補の言っていることが客観的に正しいかどうかは判らないけれども、彼は嘘は言っていない。一方、クリントン候補の言っていることは客観的には正しいかもしれないが、彼女は嘘を言っているに違いない」と思って、トランプ氏を大統領に選出したのである。

記紀神話に「オモイカネ（思金神）」という名の神がいる。天照大神が天の岩戸に身を隠された際に、天の安原に集まった八百万の神々に天照大神を岩戸の外に出すための知恵を授けたのが最も有名なエピソードである。オモイカネとは、「様々な思いを兼ねる」という意味であって、それ故、「八意思兼神」とも記す。決して、一人の絶対的超越神からの啓示の中に真理があるのではなく、多くの人々の願いを集約して行くところにこそ、真実があると考えるのが神道である。

歴史 絵葉書 シリーズ③

伊勢二見ヶ浦立石

マイケル・パイ（マールブルク大学名誉教授）

夫婦岩は伊勢エリアで最も人気がある名所のひとつです。よって、古今、多くの絵葉書になっていても驚くには値しないでしょう。ここに紹介する絵葉書は、神道フォーラム52号（平成28年1月1日号）の歴史絵葉書シリーズ第一回に取り上げた伊勢神宮内宮の絵葉書と同じセットのものであり、こちらには藤原定家（1162～1241年）の和歌が添えられています。

ます鏡　二見の浦に　みがかれて

神風清き　　夏の夜の月

この和歌は定家の『拾遺愚草』第1849番目に集録されています。定家は夏の夜の満月にひらめきを受けたのでしょう。彼は二見ヶ浦の鏡のような水面に目を留めたのです。絵葉書は月が有名な二つの岩の間に輝く様を描いています。

定家の時代にはまだ、この二つの岩は「夫婦岩」として知られていたわけではありませんでした。このような呼び名は大正時代の天皇の行幸以降に始まりました。絵葉書の裏面の情報によると、この絵葉書は1907年（明治40年）から1918年（大正7年）の間のものとわかります。そして、この岩が「夫婦岩」ではなく、「立石」と表記されている点を考えると、大正天皇行幸以前、おそらくは明治時代に制作されたものではないかと推測されます。当時、人々は朝日をこの二つの岩の間に描くことが多かったのですが。

そして、夫婦岩は伊勢神宮の一部ではなく、その権威の下にあるわけでもないにも関わらず、この絵葉書には「伊勢参宮記念」と書かれた８片の花形のスタンプが押されています。この二つの岩は、男岩と女岩が注連縄で結ばれ、言ってみれば岩それ自体が社なのです。

NB. Once again, the informal assistance of colleagues on the electronic discussion list “pre-modern Japanese Studies” (pmjs) is gratefully acknowledged.

神人和楽の秩父夜祭
～ユネスコ世界無形文化遺産～

塩谷崇之（秩父今宮神社宮司・神道国際学会理事）

毎年十二月一日から六日まで斎行される秩父神社の例大祭。その一連の祭礼行事の中でも、十二月二日の「宵宮」と三日の「大祭」は「秩父夜祭」と呼ばれ、神賑行事の絢爛豪華な山車（笠鉾・屋台）の曳行や勇壮な秩父屋台囃子、屋台歌舞伎や冬の夜空を彩る花火大会などで全国的に名高い。

一連の祭礼行事は、三百年以上の歴史を有し、国の重要無形民俗文化財にも指定されているが、今年十二月一日、「秩父祭の屋台行事と神楽」を含む日本の「山・鉾・屋台行事」（十八府県の計三十三件）がユネスコの世界無形文化遺産に登録されたことで、世界の注目を集めることとなった。

この秩父夜祭は、秩父の神奈備である武甲山の龍神様と秩父神社の妙見様との一年に一度の逢瀬を祝うものとの言い伝えもあるが、その深源は、里の氏神である秩父神社の神が、春先に水の恵みを与えた武甲山の水分神に、一年の農耕生活の無事終了を奉告し、感謝の祈りとともに水をお還しするという古代からの祭礼にあるといわれる。江戸期以降、秩父の街の絹織物産業の発展とともに豪華絢爛な神賑行事が付け加えられていった。

夜祭のクライマックスは、何といっても、十二月三日大祭の夜、神社から約一キロ離れた「御旅所」と呼ばれる武甲山を仰ぐ小高い丘に向け、御神幸行列と六台の笠鉾・屋台が曳行されてゆく場面。御神幸は、先導大麻、大榊に続き、猿田彦、日月万燈、楽人、錦旗、御手箱、太刀箱、次に各氏子町会の供物・高張提灯、御神饌、大幣、そして最後に神輿、宮司、総代、神馬と数百メートルに及ぶが、これに続いて、無数の提灯に飾られた豪華な笠鉾・屋台が、勇壮な屋台囃子に乗って曳き回される。最大二十トンの笠鉾・屋台が御旅所手前の急坂「団子坂」を多くの曳き手によって次々と曳き上げられる頃に、祭は最高潮を迎える。

六台の笠鉾・屋台が御旅所に揃うと、武甲山に向けて厳かに御旅所の神事が執り行われる。その後、深夜から明け方にかけて、笠鉾・屋台の曳き下ろしが行われて、全ての笠鉾・屋台が各町の屋台庫へ帰還する頃には夜も白み始める。文字どおり夜を徹しての「夜祭」である。

今年の祭において、小生は、この六台の笠鉾・屋台のひとつ、中町屋台の「梶取」を務めさせていただいた。屋台の中でも最も大きく、江戸期から伝わる豪華な屋台の舞台で、宵宮と大祭の二日間、紅白襦袢に身を包んで扇子や提灯を振りながら「ホーリャイ・ホーリャイ」と大声で囃し立てる。秩父男児の誰もが憧れる祭の花形である。梶取の囃し声に呼応して、曳行に携わる職方、下方、太鼓方、曳き子ほかあらゆる関係者の魂が集中し、それが屋台の推進力となる。満天の星空の下、屋台囃子の奏でる大波小波の太鼓の響きに揺られながら、溢れんばかりの人波みを掻き分けて夜闇を照らしながら進む屋台は、まるで神様に導かれながら大海原を航行する豪華客船。まさに神人和楽の境地に浸らせていただいた二日間だった。

話題のこの人

近現代における日本の「信教の自由」に迫る

ジョリオン・トーマス氏

ペンシルベニア大学助教授

「信教の自由」への言説や宗教政策は多様なトピックから論ずべきだ

「神道と政治」をテーマに大学で教鞭を執るが、自身の研究では特に、近代日本における「信教の自由」「政治と宗教の関わり」に着目している。

「そもそも日本人は、信教の自由という法律的な概念を、どの時期に獲得したのか。また、近代の様々な政治的言説に、信教の自由はどのような役割を担い、どういう位置を占めたのか。その辺りの課題に取り組んでいます」。さらには、時代を現代にまで下げ、法的な範囲における宗教概念の捉え方、人権・市民権としての宗教への目線などにも関心を抱く。

日本社会において「信教の自由」が制度的に確立したのは、いつ、どのようにであったのか。その解釈にはこれまで、二つの方向性からの把握があったと話す。

「一つは、大日本帝国憲法の二十八条で『信教の自由』は保障されたものの、真の自由制度は実現せず、宗教者たちは国家統制主義に適切な抵抗はできなかった、というもの。もう一つは、それを受けて、終戦後、アメリカ主導の占領軍が神道指令や平和憲法を発したことで、本当の『信教の自由』制度が日本にもたらされた、という言い方です」

そこには、国家神道の概念と日本型の政教関係への批判が前提にあり、その特殊性が、アメリカ由来の普遍的な原理たる信教の自由という思想によって是正された、との歴史観が覗き見える、と言う。「しかし、この歴史観は、理念が先行しており、史実に照らして正確とは言えないのではないか。戦前・戦中・占領時代の日本における『信教の自由』的な言説を、もっと多くのトピックから論ずる必要があります」

そうした姿勢から、占領軍が導入した思想概念のみを絶対視する解釈には、やや批判的、訂正的な目線を盛り込みつつ、論考を展開してきた。「信教の自由という概念の多様性や、また、歴史の動きに伴い、宗教政策も偶然性をはらむ展開を見せるということを忘れないようにしたいですね」

◇

学生時代から「宗教とは何か」という問題に興味を持ってきた。当初には、ジャズと宗教をつなげたユニークな視点からの研究にも取り組んだ。ジョン・コルトレーンの「悟り」が彼の作曲過程にどんな影響を与えたか、またジャズが「超越的な存在」を音楽理論的にどう捉えているか、などの論題にも挑んだ。

大学を卒業後、二年半、日本に住み、塾で教えながら日本のアニメと宗教の絡み合いを調べたこともある。大学院に入って再来日。東大や國學院大でのゼミや業務で神道にも触れた。

現在、大学で受け持つ授業の一つに、日本のポップカルチャーがある。「やはりアメリカの大学生は、ポップカルチャーを糸口に、日本文化に興味を持ち始めることが多いんです」

◇

アメリカ・アイオワ州生まれ。グリンネル大学、ハワイ大学大学院、プリンストン大学大学院を経てウィスコンシン大学大学院へ。二〇一五年秋から現職。

神社巡り⑧

ファビオ・ランベッリ

カリフォルニア大学・サンタバーバラ校教授

志賀海神社（しかうみ）

●福岡市東区志賀島877

志賀海神社は、福岡は玄界灘の入り口を見守る志賀島に位置する。その創建は不詳であるが、日本の最も歴史の古い神社の一つであり、その起源は太古に遡る。古事記や日本書紀の神功皇后伝説には、皇后の海軍の朝鮮半島に向かっての出発点とされるのだが、記紀が描く大和朝廷による朝鮮半島への侵略は、確実な歴史的証拠がない。しかしながら、五〜六世紀には日本列島と朝鮮半島との間に複雑な関係があったに違いない。志賀海神社の起源は少なくとも、この時代に遡ると考えられる。その頃から、志賀海神社は九州北部の海人の一族を率いる安曇氏の拠点や聖地であった。後に、安曇氏は日本列島各地に移住して行き、古代日本の歴に大きく貢献した。

志賀海神社は、かなり特徴的なパンテオンをもつ。祭神はワタツミ（海・綿津見・少童）神という、海の神であるが、三つの存在に分かれている。それは、仲津綿津見神（なかつわたつみのかみ）、底津綿津見神（そこつわたつみのかみ）、表津綿津見神（うはつわたつみのかみ）である。つまり、海の神は、海の三つのレベル（表、中間、底）にそって分解されるようである。同様の構造は、宗像や住吉という、太古から存在する他の海に関係する神社にもみられる。これは、上方への垂直性（下から上へ）を前提にする一般の神社とは違って、下方への垂直性（海の表から海の底へ）を主張するのである。要するに、このコスモロジーでは最も聖なるものは上（山の頂）ではなく、下（海の底）に求めるべきという構想である。

また、いつの時代か不明であるが、志賀海神社の三神は、八幡信仰と習合されるようになる。仲津綿津見神は神功皇后と、底津綿津見神は玉依姫命と、表津綿津見神は応神天皇と。これはおそらく、八世紀から始まる九州北部における八幡信仰の影響力によるものだと思われる。志賀海神社の神は鎌倉時代になると、志賀島大明神として知られるようになる。また、全国の多くの神社と同様に、ある時点から志賀海神社にも神宮寺が建立された。残存する資料が少なく、いつこの展開があったか不明だが、神宮寺の金剛山吉祥寺（天台宗）が十五世紀前半に建立されたという記録が残っている。その後、この寺院は博多にある臨済宗の承天寺の末寺となった。明治初期の神仏分離のとき、神宮寺が完全に破壊され、いまはその跡さえ残らないのだが、神社の西南にある荘厳寺（臨済宗）が吉祥寺を継承したと考えられる（ところが、志賀海神社境内には、石造の宝篋印塔（ほうきょういんとう）を始め、仏教との共存の遺跡はいくつか残っている）。

志賀海神社は、ユニークなコスモロジーを有している。日本の多くの神社は、里対山のような垂直的な世界を前提としているのに対して、志賀海神社の場合、その聖なる空間の構造が三段階に分かれている以上、水平である。中津宮は共同体の日常生活が行われる里にあたり、辺津宮は海辺という陸地と海洋との境界領域にあり、沖津宮は海神が宿る、人間世界から遠く離れた海の真ん中に位置する。

海神ワタツミを中心とする信仰でありながら、志賀海神社では山も崇拝されている。神社の最も重要な祭りは、年に二回行われる「山ほめ祭」である。かつて「狩漁の御祭」と呼ばれ、志賀島の特徴的な環境（山と海）をもとに狩猟と漁業を祝うものである。山誉種蒔漁猟祭（やまほめたねまきぎょりょうさい）は四月十五日、山誉漁猟祭は十一月十五日と、春秋に行われる。稲作を強調する近代神道の影響で、春では種蒔が加えられたようである。

志賀海神社のパンテオンと宇宙論は、興味深い特徴と展開を示している。原初的な海神信仰から、仏教の影響を受けて八幡信仰と習合され、その後、臨済宗が持つ独特の神仏関係のもとで近世を過ぎた。さらに明治維新以降、近代化しながら、その古代的なルーツを再発見しようとしてきたのである。

理事の業績・研究報告

三宅善信理事長

7月28日　大阪大学で開催されたシンポジウムで、星野俊也副学長、ハーバード大学のエズラ・ヴォーゲル名誉教授らとパネリストを務める

各界の専門家らとパネル討議を行う

8月3日　国連大学で開催された核軍縮国際フォーラムで、秋葉忠利前広島市長らとパネリストを務める

8月30日　北京で開催された中国社会科学院主催の諸宗教対話フォーラムで、唯一の日本人パネリストを務める

9月9日　大阪日華親善協会50周年記念祝賀会で司会を務める

9月18～20日　イタリアのアッシジで開催された世界平和祈りの集会で神道の祈りを行う

10月9日　一燈園で開催されたJLC200回記念難民シンポでモデレータを務める

11月16日　イスラエル国会副議長やカナダ元国務長官らが出席して東京で開催された国際指導者会議で、コメンテーターを務める

文明間対話について各国の研究者らと討議を行う

11月20日　奈良・薬師寺の村上太胤管主の晋山式に列席

11月26日　大正大学で開催された仏教文化学会で講演とパネリストを務める

現代人のあの世観について講演を行う

岩澤知子常任理事

【学会発表】

▼“The Japanese Kami and Sense of the Sacred: The Psychosomatic Aspect of Japanese Religiosity” (International Association of Japanese Philosophy, 1/7/2016.)

▼「諏訪御柱祭・再考」（神道国際学会・研究発表会、2016年11月5日）

ジョン・ブリーン副会長

【執筆活動】

▼「Japan Review 三〇号をむかえて」『日文研』57号、2016年、58–60頁

▼書評　神崎宣武、白旗洋三郎、井上正一編『日本文化事典』丸善出版2016年、『学鐙』113:3（2016年）、58–59頁

▼「世界の中の神道研究」『鴨東通信』102号、2016年、12–13頁

▼“Amaterasu’s progress: the Ise shrines and the public sphere of postwar Japan,” The Japan Society Proceedings, 152 (2016), pp.40-58

▼「知らなかった聖地のルーツ」『一個人』2016年7月号、46–49頁

【社会活動】

1．共催　国際シンポジウム鈴木大拙を顧みる：没後50年を記念して、日文研、2016年12月5日

2．発表　“Ise’s modern transformations or the pleasures of pilgrimage in 19th century Japan” 23rd Nichibunken International Symposium: Japanese studies down under University of Otago, New Zealand

3．基調講演　“Travels in Ise or the pleasures of pilgrimage in 19th century Japan” Japan: Tourism as a path to knowledge and development, 12th National 3rd International Conference of the Association for Japanese Studies in Spain, Facultad de Comercio y Turismo de la Universidad Complutense de Madrid, Madrid, 5.10.2016

4．発表　「戦後の伊勢神宮の公共性」20世紀と日本研究会、伊勢市、2016年8月19日

5．発表　「近代移行期に見る伊勢：参拝体験の再構築」ワークショップ：近代後期における宗教空間：課題と遠望、龍谷大学、京都、2016年7月30日

6．講演　「転換期の伊勢：近世と近代について」伊勢講座 2016 第2回、伊勢志摩さいこう会、三重テラス、東京、2016年7月7日

7．講演　“The Ise shrines: a post war history”JSPS Summer Programme, 総研大、葉山、2016年6月16日

8．発表　「近世伊勢の空間的特殊性について」神道史ゼミー、國學院大學、東京、2016年6月14日

ジョン・ブリーン副会長および岩澤知子常任理事の役職は昨年12月までのものです。

新刊紹介

『日本書紀・古語拾遺・神祇典籍集』
岡田荘司編、2016年、1900円（税別）

『「おじぎ」の日本文化』
神崎宣武、角川学芸出版、2016年、880円（税別）

『神紋総覧』
丹羽基二、講談社、2016年、1080円（税別）

『事前学習に役立つ　みんなの修学旅行　～伊勢志摩』
櫻井治男、小峰書店、2016年、2500円（税別）

『親子で読む　大祓詞物語　［絵本版］』
文：吉村政徳　絵：深田泰介、神社新報社、2016年、1200円（税別）

『神仏関係考』
加瀬直弥他、神社新報社、2016年、500円（税別）

『日本まじない食図鑑』
吉野りり花、青弓社、2016年、2000円（税別）

『まんがで読む古事記』第6巻
久松文雄、青林堂、2016年、933円（税別）

編集後記

読者の皆様、新しい年をいかがお迎えでしょうか。神道国際学会は今年、新しいスタートを切りました。紙面でもご紹介した通り、若干の体制変更と新役員の招聘により、これからますます活動を充実させていこうという決意にあふれております。神道・日本文化研究における専門的知識の蓄積とそれを広く一般へ普及させるという本会の責務・役割をより一層果たしつつ、それを本紙などで多くの方々にお伝えしていく所存でございます。今後とも本紙を応援くださり、ご意見やご感想をお寄せいただけますと幸いでございます。なお、連載の書評は都合によりお休みさせていただきました。

神道国際学会からのお知らせ

◎いつも社報や刊行物をお送りくださり、ありがとうございます。
◎ご入会のご案内：神道国際学会にはどなたでも入会できます。資料をご請求ください。

一般会員（年会費）	3,000円
賛助会員（年会費）	10,000円
（法人会員（年会費）	100,000円）
特別賛助会員（個人・一時金）	30,000円
特別賛助会員（団体・一時金）	500,000円

NPO法人 神道国際学会　〒158-0096　東京都世田谷区玉川台2-1-15　ベスト用賀2F
Tel. 03-6805-7729　Fax. 03-6805-7769　info@shinto.org